



参加者の手も借りて“地球風船”を作る柴田名誉教授(右から2人目)

“茨木作品”に登場「星や宇宙と“対話”」

加茂コミセンで山大・柴田名誉教授講演

庄内にゆかりの深い詩人・茨木のり子の作品に登場する星や宇宙についての理解を深める講演会が30日、茨木の菩提寺・浄禅寺に近い鶴岡市の加茂コミュニティ防災センターで開かれ

た。茨木の詩を愛好する人たちでつくる「茨木のり子六月の会」が開いたもの。同会は茨木のり子の詩と生涯を、庄内、鶴岡との関わりの中で理解し、深めようと15年前に発足。会報の発行や講演会などを行っている。今回は天文学者で山形大学名誉教授の柴田晋平さんが講師となり、「星ぼしとの対話」茨木のり子の愛した星座を語る」をテーマに、星の誕生や宇宙の捉え方などについて実験やスライド投影を交えて解説。林裕子さんのハープの演奏や、六月の会有志による詩の朗読などを織り交ぜて行った。柴田さんは1954年、

兵庫県生まれ。東北大学卒業。理学博士で専門は宇宙物理学。山形大教授を2020年に退任。星のソムリエ、NPO法人小さな天文台の創設者として活躍している。学生時代から茨木作品のファンで、茨木が日頃から星座早見表を持ち歩いていたことに感激したという。最初に柴田さんは地球をイメージするために青い風船を直径4分の大きさに膨らませ、「エベレストは0・8メートルの高さ、地球から500キロ離れた国際宇宙ステーションでさえ、風船から5センチ離れたところを飛んでいるイメージ。地上から見る星もステーションから見る星も、さほど変わりはない。人工の光がない所を探せば、平野部でも満天の星が見られる」と話した。また、「宇宙には引力と斥力の2つの力があるが、せめぎ合いの中で、引き放そうとする斥力が勝っている。生命は引力が打ち勝ったところで生まれている。これからも引力が勝つ方法を理性で追究していきたい」とまとめ、集まった120人の参加者を茨木も愛した星空の世界に引き込んだ。